

## P-34

上部消化管Carcinoid腫瘍とInflammatory Fibroid Polypに対する内視鏡的切除における超音波内視鏡の有用性

(内科学第四)○三治哲哉・谷 穰・  
緑川昌子・半田 豊・森田重文・大野博之・  
吉田 肇・鶴井光治・三坂亮一・川口 実・  
斎藤利彦

【目的】上部消化管Carcinoid腫瘍(Carcinoid)とInflammatory Fibroid Polyp(IFP)に対する内視鏡的切除における超音波内視鏡検査(EUS)の有用性について検討した。【方法】術前EUS診断と術後病理学的診断を比較し①病変の局在診断の正診率②正診された病変のEUS像の特徴③内視鏡的切除された場合その完全切除率について検討した。【対象】当院でEUS施行し内視鏡的又は手術で切除され病理学的検討可能のCarcinoid5症例7病変、IFP4症例4病変、[Carcinoid] 病変部位は胃C領域5病変、胃M領域1病変、十二指腸球部1病変、肉眼型は山田I型5病変、III型1病変、IV型1病変。切除は全病変内視鏡的に行われ、山田IV型の病変にはPolypectomyが、他の病変は内視鏡的粘膜切除術(EMR)が施行された。[IFP] 病変部位は全て胃A領域、肉眼型は山田I型2病変、IV型2病変。切除は3病変が内視鏡的に、1病変が手術により施行された。内視鏡的切除の3病変の内2病変は山田IV型でありPolypectomyが、他の1病変はEMRが行われた。【結果】[Carcinoid] ①正診率85.7%(6/7)②1層の不整がみられた病変16.7%(1/6)、2層の肥厚と3層の不整がみられた病変100%(6/6)、4層以深の不整がみられた病変はなかった。1層、3層の不整、2層の肥厚はいずれもLow echoとしてscanされ、病変の境界は明瞭であった。③完全切除率85.7%(6/7) [IFP] ①正診率100%(4/4)②2層の肥厚がみられた病変75.0%(3/4)、3層に肥厚または不整がみられた病変100%(4/4)、1層と4層以深に不整がみられた病変はなかった。③完全切除率100%(3/3)【結語】i)CarcinoidとIFPのEUSの局在診断の正診率は85.7%、100%であり病変の局在診断に有用と考えられた。ii)CarcinoidとIFPのEUS画像の特徴は2層肥厚、3層不整の境界明瞭なLow echoであり、EUS上では鑑別は困難であった。iii)CarcinoidとIFPの内視鏡的切除術の完全切除率は85.7%、100%であり治療に有用と考えられた。本発表は東京医大がん研究所事業団がん研究助成金による。